BOOK X — 見えざる戦争

第04章 — 強さの限界

01 — 不完全な動作

雨は日没の少し前まで降り続けた。ロイが座っていた庇の下では、地面のくぼみに水がたまっていた。バスが建物の前を通るたびに、水は壁の方へ動いては戻った。

彼は数分前から右手を開いたり閉じたりしていた。指の動きは多少改善していたが、意識を集中させなければ薬指と小指を同時に曲げることができなかった。集中をやめると、手は開いても閉じてもいない状態に戻った。

バケツを持った男が建物から出てきた。ロイを見ると足を止めた。

「誰かを待っているんですか？」

「いや。もうすぐ行くよ」

男は排水口にバケツの水を捨てた。入口は七時に施錠するが、建物が閉まった後も庇の下には入れると言った。

ロイは礼を言った。

市内のこの一角にたどり着くまで、ほぼ一日を費やしていた。歩いた距離の多くは、通れない道を迂回した結果だった。路面電車の停留場で会った女のことで、監視されていたかもしれない場所を避ける理由がもう一つ増えた。会話の内容を報告した後、彼女がどのような指示を受けるのかは分からなかった。

治療が必要かと問われ、彼は正直に答えた。相手が自分を何者だと考えているのか、先に確かめなくてもそう答えられたことに安堵していた。

あの女の最初の申し出を受けていたら、どうなっていただろう。車両が用意され、知らない建物へ連れていかれ、そこで医師は、自分ではほとんど左右できない状況の中で判断を迫られただろう。彼はすでに兵士に取り囲まれた建物で治療を受けたことがある。同じ経験をもう一度したとして、なぜ今度だけ違う結末になるのか、想像できなかった。

彼は立ち上がり、歩道を横切った。通りの向こうにある小さな屋台は店じまいの準備をしていた。店主の女がカウンターから容器を持ち上げようとしたとき、取っ手が手から滑った。ロイは助けようと手を伸ばした。

一瞬、容器が地面に達する前にその動きを止められるという、かつての確信がよみがえった。ほとんど見なくてもできたはずの動作だった。

右腕が動いた。容器が手のひらに当たって回転した。病院を出て以来感じたことのない種類の痛みが、肩から首の側面へと走った。

彼は容器から手を離した。

容器はカウンターの縁に当たり、横倒しになった。中身はほとんど残っておらず、店主は笑いながら身をかがめて拾い上げた。

「大丈夫。ほとんど入っていなかったから」

ロイは後ずさりした。手が再び震え始めていた。

女は彼の様子をよく見た。「怪我をしたの？」

「今日より前にね」

椅子を勧められたが、彼は断った。交差点には歩行者用信号が変わるのを待つ人々がいた。明らかに姿勢を変えずに腕を動かせるようになるまで、彼は屋台のそばに留まった。

容器は、最初の診察の際にイマニから持ち上げるよう求められた器具よりも軽かった。あのときは動作の準備をすることが許されていた。彼女から止めるよう言われれば、止めることもできた。

病院で表示された数値を思い出した。その数値が自分に何ができるかということを、いかにわずかしか説明していなかったかも。回復とは、自分がしようとすることと身体が許すことの差が小さくなることだと考えていた。

落下した容器は、別の差を明らかにした。してはいけない動作だと思い出すよりも先に、身体が動き始めていたのだ。

彼は手をポケットに入れ、屋台を離れた。

かつては、何かが落ちるのを見てから手が届くまでの時間が極めて短いことを頼りにできた。今では、その時間が自分の安全のためには短すぎる場合もあると分かっていた。

02 — 不適切な測定

地域施設では、M-06への聞き取り調査が終わった後、医学的評価の要請が出された。彼女が通知を受け取ったのは、まだM-04と廊下に座っていたときだった。

診察室へ案内に来た職員は、遭遇時に負傷したのかと尋ねた。

「身体的な接触はありませんでした」

職員は要請書をもう一度確認した。「接触があったとは書いていませんね」

「何を評価するのですか？」

「いつもと同じ項目です」

彼女は廊下の突き当たりの部屋まで同行した。会ったことのない医師が、三つの器具を並べた台のそばで待っていた。今後の任務への投入に適しているか確認するよう求められたのだと説明した。

診察は手と腕の動作から始まった。医師は視覚信号に反応するまでの時間を計測し、もう一方の手でも同じ検査を繰り返すよう求めた。結果に満足すると、そばの端末に一連の数値を入力した。

「問題があるのですか？」

「いいえ。予想範囲内です」

「では、なぜここへ呼ばれたのですか？」

作戦中の出来事を受けて評価を求められたと医師は言った。その出来事の詳細は知らされていなかった。

M-06は台の上の器具を見た。どの器具にも、彼女がある人物を路面電車の停留場から去らせた理由を明らかにすることはできない。ロイ・バッティについて提供された医療情報を見たことがあるか、医師に尋ねた。

医師はその概要を見ていた。

「今、私に行わせた動作は、彼にとって有害なものになる可能性がありますか？」

「負傷の程度によります」

「負傷していても、その動作を行うことはできますか？」

医師は彼女を見た。

「可能性はあります。動作を行えるからといって、組織がそれに耐えられる証明にはなりません。あなたも知っているでしょう」

確かに知っていた。あの日の午後まで知らなかったのは、バッティの能力評価が、彼自身に相当な負担を強いた動作に基づいているかもしれないということだった。

「では、新しい記録が古い記録より有用とは限らないのですね」

医師は何の記録について話しているのかと尋ねた。彼女が病院での遭遇を挙げると、医師は器具を置いた。

「その資料について話す許可は得ていません」

「資料について話してほしいのではありません。力と負傷の関係について尋ねています」

医師は、ある反応に割り当てられた数値は、反応そのものを表しても、その反応を生じさせた人物の状態までは表さない場合があると説明した。その後何が起きたかを明らかにするには、数種類の情報が必要になる。

M-06は、同じ注意事項が自分にも当てはまる可能性があるかと尋ねた。

「もちろんです」

「その場合、私は知らされるのですか？」

医師は答えるまでに少し間を置いた。任務への適性に影響する状態があれば、報告する義務があると言った。

「誰に？」

医師は端末を示した。報告書は要請を出した当局に自動送信されるのだった。

彼女は画面を見た。用紙の上部に自分の識別番号が表示されていた。その下には、作戦部門からの要請による診察であることを示す欄があった。結果の写しを受け取りたいかどうかを本人が記入する欄はなかった。

評価が終わると、医師は廊下へ戻ってよいと言った。彼女は印刷した写しを求めた。

医師は印刷を試みた。人員記録を管理する部門だけがその文書を印刷できるというメッセージが表示された。

「そちらに請求してください」

彼女は尋ねられたすべての質問に答えた。求められた動作はすべて行った。結果に異常はないと告げられた。

自分自身の身体についての評価は、すでに彼女には閲覧することのできない文書となっていた。

03 — 承認された間隔

イマニが病院を出る準備をしていると、地域施設から電話がかかってきた。電話の相手は軍医であると名乗り、氏名を伝えた。イマニはその名前が軍の職員のものであることを確認できた。

相手は、作戦の最中に病院を去った患者の状態についての陳述書に関して話したいと言った。

「彼は見つかったのですか？」

軍医は、作戦についての情報を提供できる立場にはないと答えた。

「誰かが診察したのですか？」

「私の知る限りでは、まだです」

彼は、あのような状態の患者が長時間の活動に耐えられるようになるまで、通常どの程度の時間が必要かと尋ねた。

イマニは鞄を机に戻した。

「診察しなければ推定はできません。陳述書に記したのは、彼が去る前に私が観察した状態です」

軍医は理解していると答えたが、作戦上のリスク評価には対象者の状態がどの程度の速さで改善するかという推定が必要だと言った。

「新たな診察の所見をすべて送っていただければよいのです」

「現時点ではそれはできません」

「では、数値をお伝えすることもできません」

相手は、患者が病院を去って以来、院内で観察された活動水準を維持できていた可能性について尋ねた。イマニは、そう仮定するのは賢明ではないと答えた。むしろ彼がまさにそうしようとしていた可能性を心配していたのだ。

軍医はその違いを理解していないようだった。

イマニは、患者がその場で発揮しうる身体活動能力は、長期的な回復のために許容される水準を超える場合があると説明した。危険な状況から逃れなければならない者は、どれほどの損傷を受けているか知らないままその能力を使うかもしれない。

「彼だけに特有の現象ではありません。ただ、結果は彼に特有のものになるかもしれません」

軍医はその警告を、患者が安静にしているべき期間として表現できないかと尋ねた。

「診ていない患者に対して期間を指定することはできません」

相手は時間を割いたことに礼を言った。電話を切る前に、イマニは再診を勧めたこと、患者が見つかった場合は必要不可欠でない移動に先立って診察すべきだということを記録するよう求めた。

相手は記録すると答えた。

隣室ではエイドリアンが、失われた付属資料の改訂経緯を突き止めようとしていた。イマニは電話について彼に話した。

「彼がいつまた力を取り戻すか知りたいらしいの」

「何をするのに十分な力だ？」

「電話をかけてきた人自身も知らされていないと思う」

エイドリアンは机上の用紙を回して、彼女が参照情報を読めるようにした。見慣れない医療部門がまだ掲載されている、名簿の旧版を見つけていた。その機能はわずかな言葉で説明されていた。例外的勤務状態の評価。

「もともと患者を扱う部門じゃなかったんだ」

イマニは説明を読んだ。その部門が評価するために設けられた、人々の状態についてはほとんど何も書かれていなかった。

彼はまた、ある診察期間の観察結果を次の期間へ引き継ぐことを可能にする書式への参照も見つけていた。入手できた写しには記入方法しかなかった。記入済みの例はなかった。

「おそらくこれが、彼らが付属資料を欲しがった理由だろう。予備試験の資料に同じ書式が使われていれば、試料の出所について何か分かるかもしれない」

「あるいは、私たちに何かが分かるかもしれない」

彼はうなずいた。その可能性を検証するための文書は、二人のどちらも持っていなかった。

イマニは引き出しからロイの最後の診察報告書を取り出した。安全に退院できるか判断するための評価だった。別の建物のどこかでは、その同じ観察結果が彼の身柄を確保するためにどれほどの力が必要かを判断するのに使われていた。

電話をかけてきた人物が、この二つが異なる問いであることを理解していたかどうか、彼女には確信がなかった。

04 — 仲介者

レイチェルが医療協会に着いたのは、閉館の少し前だった。受付係は彼女を見覚えており、ミンが対応できるか確認しに行った。

待つ間、レイチェルは配達員が封筒の入った箱を建物に運び込むのを見ていた。彼は身分証の提示を求められることなく扉を通り抜けた。おそらく何年も協会に配達してきたのだろう。

こうした日常的なやり取りが、いつまで手順を変えられずに続くのだろうかと思った。

ミンが出迎えに来た。協会は受領した記録に関する正式な情報提供要請を受け取っていた。記録の提出を命じるものではなかった。いかなる権限に基づいて記録を保有しているのかを明示するよう求めるものだった。

「それには答えられます」とミンは言った。「医療記録の完全性に疑義がある場合、独立して保全する手続きがあります」

「それで十分でしょうか？」

「十分なはずです。ただ、十分だと認められるかは分かりません」

二人は事務室に入った。ミンは、内容を開示せずに記録の存在に関する声明を発表することについて、会長から同意を得ていた。彼女は草案をレイチェルに見せた。

声明には資料を受領した時刻、受領確認書に記された資料の説明、変更せずに保全するという協会の義務が含まれていた。その資料が法令違反を立証するとは主張していなかった。

レイチェルは二度読んだ。

「病院へ写しを送っていただけますか？」

「ええ。記録を担当する医師宛てに」

「そうすれば、研究の一部がまだここに残っていることをイマニ医師が知ることができますね」

ミンは、その医師が彼女の市内滞在を知っているのかと尋ねた。

「私がまだ誰かに資料を届けようとしていることは知っていると思います。私の居場所について、何を知っているかは分かりません」

法律顧問は声明を脇に置いた。もう一つ話したいことがあった。その日の午後、記録を届けた人々の名前を尋ねる男が協会を訪れていた。氏名の開示を要求する文書は提示していなかった。受付係は彼をミンに取り次ごうとしたが、ミンが話せるようになる前に立ち去っていた。

レイチェルは、何か伝言を残していたかと尋ねた。

「番号だけです」

ミンは受付係が番号を書き写したカードを見せた。ある当局を指す参照番号だったが、当局の名称は記されていなかった。レイチェルには見覚えのない番号だったが、その形式には覚えがあった。病院でエイドリアンに見せられた書類に似たものがあった。

「もしまた来ても、私のためにここの誰かを危険にさらさないでください」

ミンは彼女を見た。

「係官にあなたの名前を知らせる権限があるかどうかを、受付係が判断する必要はありません。それは私の責任です。権限があると確認できない場合にも、対処する方法があります」

レイチェルはその答えをありがたく思った。誰にも何も起こらないという約束とは違っていた。

彼女は、まだロイと連絡が取れないことを法律顧問に話した。イマニと話すだけでもと、病院へ行くことを考え始めていた。ミンは連絡なしに病院へ行くことには反対だった。研究の調査に関わる人々がまだいるかもしれない。

「何か知らせを受け取っていないか、彼女に尋ねていただけませんか？」

「声明を送るときに聞いてみます」

レイチェルは確信を持って伝えられる唯一の情報をミンに告げた。別れたときロイは負傷しており、それ以降適切な治療を受けられたとは思えないということだった。

法律顧問はそれを別の用紙に記録した。研究の保全に関するファイルには入れなかった。

「彼には、記録をめぐる争いに関わっていない人が必要かもしれませんね」

「そうなんです」

レイチェルは膝の上の書類の包みを見た。病院を出てから訪れたすべての事務所で、書類がなぜ重要なのか説明しなければならなかった。書類が重要だということが、ロイについて語るときに誰かが耳を傾けなくなる理由にもなりうると、彼女は分かり始めていた。

ミンは電話を取り、イマニの事務室につないでほしいと頼んだ。

05 — 二度目の遭遇

市営ポンプ場に沿った通路は、地区の商店が閉まった後も開放されていた。施設の職員や、その両側にある住宅街を行き来する人々に利用されていた。ロイは以前にも一度ここを通ったことがある。何かを記憶しておく理由もなかった頃のことだ。

彼が着いたとき、保守担当の職員が脇の入口から出てくるところだった。職員は扉に鍵をかけ、通りへ向かった。そこで待っていた女が彼を迎え、二人は一緒に歩き始めた。

ロイは建物の外壁に取り付けられた照明の下で足を止めた。壁の向こうからモーターの音が聞こえた。この二日間に通りで耳にしたどんな音よりも規則的だった。

反対方向からスーツ姿の男が通路に入ってきた。靴は濡れているのにズボンはほとんど乾いていることを除けば、特に目を引く外見ではなかった。

男は数メートル離れたところで止まった。

「ロイ・バッティ」

ロイは答えなかった。通路にはもう他に誰もいなかった。保守職員と女は通りの角まで来ていた。

「あなたを地域施設に連れてくるよう命じられました」と男は言った。

「そこへ行くように、すでに別の人間に言われたよ」

「承知しています」

「俺が行かない理由を、彼女は話したか？」

「遭遇時の状況について報告を受けています」

男は何の苦もなさそうに話した。焦っている様子もない。ロイはいつの間にか男の手の位置を見ていた。次いで、その足と歩道の縁との距離を見た。

「お前の番号は？」

「M-08」

ロイは壁から少し離れた。屋台での出来事以来、肩はまだ痛んでいた。どんな動作をすれば痛みが増すのか、まだ判断できなかった。

M-08はその場に留まるよう求めた。通路の入口まで車両を呼ぶことができると言った。

「俺は逮捕されるのか？」とロイは尋ねた。

「あなたには確保命令が出ています」

「命令の内容は知っている。それを逮捕と呼ぶのか？」

男は答えようとしなかった。会話を長引かせたい様子はなかった。

ロイは男の向こうを見た。通路の反対側で防犯灯が点灯した。誰かが建物の入口に立ち、電話を見ていた。

「お前とは行かない」とロイは言った。

M-08が前進を始めた。

その動きにはほとんど予兆がなかった。ロイは病院で似た動きを見たことがあったが、二人の間の距離が縮まったときに起きたことは違っていた。M-08は勝負で優位に立とうとしているのではなかった。回収すべき人物を指定されており、最初の動作は、その人物の身体のうち最も容易に制御できると考えた部分に向けられていた。

ロイは身体をひねった。左手が男の腕に触れた。その衝撃でロイは壁に押し付けられた。男が離れるのを阻止しようとしたとき、背中全体にかかる圧力が急に変化するのを感じた。

彼は機会を見極め、それを利用した。一瞬の動作だった。M-08が確保した位置を生かすより先に、二人の間に空間が生まれた。

M-08はほとんど即座に体勢を立て直した。

ロイは予想していた瞬間には肩の痛みを感じなかった。痛みが来たのはその後、左手が相手の身体から離れたときだった。一瞬、通路がそれまでより明るく見えた。立ったままでいることに力を費やしているのが分かった。

M-08は彼を見ていた。対象者には、自身が用いているように見える力より大きな力を伴う動きを阻止できる能力がある、と説明されていた。機密指定人員一人で回収を完遂できる確率についても推定値を与えられていた。

そのどちらも、たった今起きたことをほとんど正確に説明してはいなかった。

ロイは息をついた。動く準備ができていることと、実際に動けることの違いには慣れていた。だが、その違いを隠す能力は失われ始めていた。

「こんなことをする必要はない」

M-08は無言でロイを見た。

二人の背後で扉が開いた。保守職員が戻ってきたのだ。脇の入口の鍵を手にしており、扉から数歩先のところで立ち止まった。

「何が起きているんですか？」

二人とも答えなかった。

M-08が職員の方へ顔を向けたとき、ロイは、その動きが生み出した機会よりも重要なことに気づいた。今や二人と建物内部の機械との間には、もう一人の人間がいた。

彼は前進する代わりに後ずさりした。

06 — 次の動作の代償

保守職員はポンプ場に忘れた鞄を取りに戻ったのだった。通路で目にした事態を理解しようとしていた。二人の男のうち一人が負傷していることは分かったが、どちらがその怪我を負わせたのかは分からなかった。

M-08はポケットから文書を取り出し、この通路は公的な作戦のために使用されていると告げた。職員に通りへ戻るよう指示した。

「扉を施錠しなければならないんです」と職員は言った。

「後でできます」

ロイは、職員が扉を開けたままにしていることに気づいた。その背後には、建物の明るい場所へ下りる階段があった。二人目の職員が階段を上ってくるところだった。

M-08が再び動いた。ロイは、他の人々が入口から離れるまで待つだろうと思っていた。その予想のために、反応に使えたはずの時間の一部を失った。

気がつくと壁に押さえ付けられていた。右腕で試みた動作は、手が目指した場所に届く前に終わった。腕の動きを阻止されたのか、それとも自分が腕を動かせなかったのか、判断できなかった。

M-08は難なく体勢を維持していた。立ち位置を調整し、職員にその場から離れるよう声を上げた。

ロイの後頭部が壁に当たった。一瞬、目の前の男の顔が見えなくなった。

ハヴェルに対して自分がしたことを思い出した。

動作を始めた意思が、その動作をもはや支配しなくなった瞬間があった。その瞬間より前の大臣の顔を覚えていた。そこへ戻ることはできなかった。その後に起きたことをいくら考えても、もう一度機会を与えられたなら自分がどう行動したか、確かめることはできなかった。

今、彼には別の種類の機会が与えられていた。

彼は意図した以上の力で応じた。目の前の男がその位置から押しのけられた。何かが配電盤の金属製の外装に当たる音がした。ロイはM-08の顔を一瞬見た。何が起きたかを男が理解したのは、すべてが終わった後だった。

保守職員が叫び声を上げた。開いた扉に向かって後ずさりし、片膝をつくように転倒していた。同僚が立たせようとしていた。

ロイは再びM-08へ向かうこともできた。すでに動き始めていたとき、入口にいる二人の職員が目に入った。

彼は止まった。

動作を止めるのに必要な力は、たった今使った力とほとんど同じほどの痛みを伴った。

M-08は立ち上がった。左腕を見てからロイを見た。ロイがその位置に留まっていること以外には、何にも驚いていないようだった。

二人目の職員が、応援を呼ぶと叫んだ。同僚が転倒するのを見ており、脚を負傷した可能性があると思ったのだ。

ロイは最初の職員を見た。

「立てるか？」

職員はうなずいた。同僚が肘を支えていた。二人とも、ロイにそれ以上近づいてほしくないようだった。

M-08はコートの下に携帯していた無線機を取り出した。そして無線機に向かって話し始めた。依然として通りへの直接の経路を塞ぐ位置にいたが、もうロイに向かって動いてはいなかった。

ロイは通路のもう一方の入口へ歩いた。一歩進むたび、背後から男の靴音が聞こえてくるのではないかと思った。入口までの半ばで、右手の感覚が奇妙なほどに失われていることに気づいた。見下ろすと、手はまだそこにあった。他の身体の部分とともに動いていた。

大通りに出た。閉店した商店の外に立っていた二人が振り返った。ロイは歩き続けた。

通路にいる間に信号が変わっていた。道路の向こうには、公共階段の入口を示す照明付きの標識があった。階段を上る前には一度止まらなければならないと分かっていた。

スーツ姿の男に敗れたわけではなかった。二人が接触していた短い時間の中で、相手に阻止できない動作を行うことができた。

しかし、それをもう一度できるとは思えなかった。

07 — 相手を退けた力

デレンは遭遇についての報告書が届く前に、その通知を受け取った。市営施設の近くで機密指定人員の一人が対象者と身体的に接触し、回収は完遂されなかった、と記されていた。

二つ目の通信では、同じ場所で起きた民間人に関わる事故について触れていた。作戦に関与した部隊ではなく、市の担当機関から送信されたものだった。

デレンは二人の職員の状態について説明を求めた。一人は膝を負傷していた。もう一人は施設を安全な状態にして離れられるよう、交代要員をポンプ場に派遣する手配をしていた。

第三者の負傷についての報告はなかった。市の担当機関が医療支援を要請したのは職員のためだけだった。

「バッティは？」とデレンは尋ねた。

中尉は彼の状態について情報を持っていないと答えた。

大尉は遭遇に関与した人員に尋ねるよう指示した。中尉は要請を転送した。機密指定人員の評価を実施中であり、完了後に追加情報を提供する、という回答が届いた。

地域施設では、M-08が診察室に座っていた。上着を脱いでおり、医師が配電盤にぶつかった腕を診察していた。

重傷ではなかった。おそらく数日間は痕が残る。医師はその日の夕方早くにM-06に行わせたのと同じ動作を求めた。

M-08はそれらを行った。医師は結果を入力した。

診察が終わる前に係官が到着した。医師が任務に戻ってよいと告げるまで、係官は扉のそばで待った。それから、対象者が回収を阻止した際の身体的な動作について説明するようM-08に求めた。

M-08は遭遇時の状況を説明した。係官は二度目に押しのけられた部分について、もう一度説明するよう求めた。その動作が、病院での作戦後に対象者に認められた筋力の水準と一致するか知りたかった。

「それは判断できません」とM-08は答えた。

「力は予想よりも大きかったか、小さかったか？」

「その時点での予想より大きかったです」

係官は記録を取った。相手を押しのけた後、対象者は動作を続けようとしたか尋ねた。

「いいえ」

「続けるのを阻止されたのか？」

M-08は質問について考えた。「他に二人の人間がいました」

「彼を援助していたのか？」

「いいえ。施設の職員です」

係官は、対象者が職員の存在を利用して回収を中断させたのかと尋ねた。

M-08は、対象者が彼らを通路へ呼び込もうとしたことを示すものは見なかったと答えた。一人は施設に何かを取りに戻った。もう一人は何かが起きている音を聞いて扉のところへ来た。

係官は、彼らを見たロイが何をしたのか知りたがった。

M-08はそれを伝えた。

係官は報告書の別の箇所に情報を記入した。民間人がいる状況での対象者の行動についての項目だった。その陳述を身体能力の推定値と併せてどのように利用するのか、書式には何も説明されていなかった。

「回収を再開できたか？」と係官は尋ねた。

「はい」

「なぜしなかった？」

「現場が適切ではなくなりました。状況の変化を報告しました」

沈黙があった。遭遇時の状況は異なっていたにもかかわらず、M-08はM-06にも向けられたのと同じ質問に答えていた。係官は作戦の承認を記した文書を見た。その中に別の答えを要求する何かがあるか確かめようとしているようだった。

係官はM-08に、次の任務への投入に備えて待機するよう告げた。

報告書の概要が司令部へ届いたとき、民間人に関わる事故の記述は別項目として添付されていた。デレンは両方の文書を読んだ。

概要には、対象者が予想外の力で相手を押しのけることに成功したと記されていた。M-08は対象者が片腕を使うことに困難を感じているように見えたと述べていたにもかかわらず、動作後の対象者の状態についての観察は一切記されていなかった。

デレンは統合幕僚部へ電話した。ヴェイルが応じた。

「二度目の回収失敗だ」とヴェイルは言った。

「今日の午後よりも状態が悪くなっているかもしれない患者がいるのです」

「最新の報告では、彼は依然として割り当てられた人員に抵抗する能力を有している」

「続けることができたときにも、続けなかったことも示されています」

ヴェイルは、後者の陳述は解釈に過ぎないと言った。次の投入までに追加の評価が行われるということだった。

デレンは机上の二つの報告書を見た。誰かがその男を診察することを許されるまでに、同じ男に対する評価があと何回行われるのだろうかと思った。

08 — 残された可能性

ロイは公共階段の下にたどり着いたが、まだ上り始めてはいなかった。入口のそばには上の通りから来る友人を待つためのベンチがあった。彼はその端に腰を下ろし、できる限りゆっくり呼吸した。

そこまでは歩くことができた。脚が正常に機能しているらしいことに、多少の安堵を覚えた。しかし何かが正常に機能しなくなったとき、それを使おうとするまで気づかないのではないかと、今では確信が持てなかった。

右手の感覚が戻り始めた。一度に戻ったわけではない。指先に不快感が生じ、続いて手首の内側から来るような圧迫感があった。彼は手を太腿に載せたままにした。

女の手を握った子供が階段を下りてきた。女は濡れた階段を見ていたので、一番下に着くまでロイに気づかなかった。子供はロイの顔を見た。彼が微笑むと、子供は母親とともに通りの方を向いた。

彼は二人が去るまで待った。

今なお助けを求めることのできる人々はいた。難しいのは、助けを求めることがもたらす結果だった。承認書が病院に何をもたらしうるか、一晩泊まった客についての質問が小さな商店に何をもたらしうるかを、彼は見てきた。自分が立ち去るときに、その結果まで一緒に持ち去ることはできなかった。

彼はポケットから電話を取り出した。画面は破損していなかった。病院を出る前に交わしたメッセージをもう一度見た。

今座っている通りについて説明したメッセージを送ることはできた。しかし、次に移動しなければならなくなる前にレイチェルに届くかどうか、あるいは、作戦によって占拠されている通りのどれかへ誘導されずに彼女がここまで来られるかどうかは分からなかった。

彼は何も書かずにアプリケーションを閉じた。

病院では、イマニがミンとの通話を終えたところだった。協会が記録の一部の写しを受領したことを知った。また、レイチェルがまだロイと連絡を取ろうとしていることも知った。

彼女はエイドリアンに会話の内容を話した。研究のどの部分かはまだ分からなかったが、その一部が病院の外で保全されていることに彼は安堵した。協会を通じて自分からレイチェルへ伝言を届けられないかと尋ねた。

「何を伝えたいの？」

「失われた付属資料の参照情報を見つけたかもしれない、と」

イマニは腰を下ろした。もう一つの知らせについて考えていた。病院の救急部門は、市の担当機関からポンプ場での事故で負傷した人物を診察できるかどうかという問い合わせを受けていた。通常の問い合わせであり、事故についてそれ以上のことは何も知らなかった。

ロイと何か関係があるかどうかは分からなかった。その可能性を考えたという事実そのものが、病院の外で何が起きているのか、いかにわずかな情報しか持っていないかを彼女に示していた。

「レイチェルが私たちと直接話せる方法を見つけなくては」と彼女は言った。「ここに来なくても済む方法を」

エイドリアンは同意した。協会が手配を助けてくれるのではないかと尋ねた。

イマニはもう一度電話を取り上げた。

地域施設の廊下で、M-06は診察から戻るM-08を見かけた。ポンプ場で何があったのか尋ねた。

彼は対象者に遭遇し、回収できなかったと答えた。

「彼は負傷していた？」

「会ったときにはすでに負傷していた」

「その後、悪化した？」

M-08はすぐには答えなかった。ロイが動きを止めたときの顔と、通路の入口へ歩いていった姿を思い出した。

「そう思う」と彼は答えた。

M-06は廊下の先を見た。追加指示の要請を受け付けた事務室は、まだ開いていた。

彼女は、職員が診察室へ連れていくために来たときに座っていた椅子へ戻った。対象者の独立した診察についての質問には、まだ答えを受け取っていなかった。

もう一度尋ねることにした。

公共階段の下で、ロイは電話をしまった。立ち上がれるほどに痛みは和らいでいた。左手を手すりに置き、最初の一段を上った。

二段目に挑む前に、しばらくそこに立っていた。

一つの動作から次の動作までの間隔を可能な限り小さくすることを学ぶために、人生の多くを費やした。今は別のことを学んでいた。

彼はもう一段上り、待った。

第04章 終。